

■黒田麴廬 蘭学者、啓蒙思想家。「ロビンソン・クルーソー」翻訳で、初の英文学紹介も、知られずに終わる。

くるだきくる

日本外史・・・1827＝ 近江国膳所で、黒田扶善(梁洲)・たつの次男に生まれる。名は行、行元。通称行次郎。

幼少より、膳所藩校(遵義堂)頭取だった父から家学を学んで経史に通じ、博覧強記の誉れ高く、

・・・・・・1836＝9歳：

大塩平八郎乱1837＝10歳：

適塾ワゴン・1838＝11歳：この年、緒方洪庵が大坂で(適塾)を開く。

順天堂始・・・1843＝16歳：父の命で、大坂に出、緒方洪庵の(適塾)に入門。

語学の天才ぶりはすぐに現れ、

阿部正弘首座1845＝18歳：猛暑のため帰郷。藩医が貸してくれた蘭書「ナチュル・キュンデ」を翻訳、処女作「初学窮理抄」となる。

孝明天皇・・・1846＝19歳：退塾して帰郷、藩主本多康禎にお目見えを許される。藩では攘夷論が盛んで、周囲から蘭学修業を反対されたことから、大坂の儒者藤田東穀に入門したが、すぐに辞め、

・・・・・・1847＝20歳：中小姓組に取り立てられる。京都の著名な儒者岡内六蔵(岩垣月洲)へ入門するも続かず、広瀬元恭の蘭学塾(時習堂)に転じると、外国船が頻繁に来航する状況に駆り立てられ、

・・・・・・1848＝21歳：藩に願い出て、学文修行のため江戸の安積良斎塾に入門。

この間、「博物地理篇」「同分析篇」「泰西楊世夫伝」を翻訳、

国定忠治疎・・・1850＝23歳：蘭訳の「ロビンソン・クルーソー」を和訳して「漂荒紀事」を発表、格調高い漢文調の名訳で忽ち評判となり、多数の写本が作られ、蘭書翻訳制限令のため、訳者名を記さずにいたため、以後、長く訳者不明。

西洋砲術蘭書和解兼学となる。江戸滞在中に、従兄弟の縁で古賀謹一郎の知遇を得、伊東玄朴塾を経て、

藩主に従い膳所に帰り、御馬廻り組に取り立てられ、父が頭取つとめる藩校(遵義堂)学文師範役となる。

藩命による多数の蘭書翻訳が満業。長崎下向途中の古賀謹一郎と再会。酒好きで麴廬と号しはじめ、

この年より日記「課業日乗」を書き始める。

松下村塾・・・1856＝29歳：藩校(遵義堂)の蘭学師範となる。

蕃書調所・・・1857＝30歳：この年、横山由清訳「魯敏遜漂流紀略」刊行。父が病気で隠居し、家督を継いでまもなく、父が死去。

五ヶ国条約・・・1858＝31歳：便利な日用暦「達通館配合西洋暦一舗」を刊行。

桜田門外変・・・1860＝33歳：蕃書調所頭取を辞任する古賀謹一郎の推挙による幕府の求めで、教授手伝として出仕、

生麦事件・・・1862＝35歳：

8月18日政変1863＝36歳：

禁門の変・・・1864＝37歳：膳所藩西洋学師範となる。開成所となった後も続け、業務に励みながら、英・仏・独語を自学自習。

薩摩藩士密航1865＝38歳：膳所で疑獄事件が起こり藩士11名が切腹、(遵義堂)督学高橋坦堂らも含まれていたため、藩の依頼で退職して帰郷、(遵義堂)学問師範役頭となる。

この年11歳の杉浦重剛が(遵義堂)に入門。西洋小銃隊軍制取調、さらに鎗奉行格となる。

大政奉還・・・1867＝40歳：黒田家由緒書作成。

明治維新・・・1868＝41歳：*ようやく本名で「漂荒紀事」を出版しようとして果たせなかったが、福沢諭吉の「西洋事情」の不備を補うべく「増補和解 西洋事情」四冊を出版、当初は不快であった諭吉を結局畏服させてしまう。

戊辰戦争終・・・1869＝42歳：(遵義堂)督学兼洋学教授となるが、

初の日刊新聞1870＝43歳：開成学校に貢進生出すに当たり、他を押しつけて杉浦重剛を推挙。廃校となり失職。

学問のすすめ1872＝45歳：自ら知らぬうち、「漂荒紀事」が斎藤庵訳として「魯敏孫全伝」と題を変え出版されてしまうなか、新政府での栄達を求めず、西洋文明伝達のため、

明治6年政変1873＝46歳：「新曆明解」「万国商売往来」「万国地名往来」「改正商売往来」「万国湊繁昌記」と、*それまでに得た知識を矢継ぎ早に著作・出版するうち、「ベンガル文典」「リグ・ヴェーダ」を英訳を参照しながら梵語から和訳すべく開設された東本願寺訳語局(訳文局)に関わるや、広範な素養とともに、再び語学の天才ぶりを発揮、

佐賀の乱・・・1874＝47歳：「政体新論」「開化新説」「西洋料理新書」出版。

初の民間工場1875＝48歳：「万国立教大意」「小学教授線形図解」出版。「榜葛刺文典(ベンガル文典)」の翻訳、続いて、

西南戦争・・・1877＝50歳：*「利慶薛陀三喜多引(リグ・ヴェーダ・サンヒーター)」の翻訳もなって、東本願寺訳語局を依頼退職。

沖縄県編入・・・1879＝52歳：高田義甫が開いた(九皋義塾)に招かれて教授となるが、

・・・・・・1880＝53歳：滋賀県令籠手田安定に「印度学興立につき願書」を提出。

明治14年政変1881＝54歳：義甫の放漫経営で(九皋義塾)は廃校となる。滋賀県師範学校漢学教授囑託となるが、

岩倉具視没・・・1883＝56歳：退職。以後、しばらく不明になるが、

国民之友始・・・1887＝60歳：この頃、義甫の出身地の蒲生郡八幡町より教授に招聴され、同町に転居するも、

恵まれない状況で、憂いを酒で紛らすうち、泥酔することが多くなり、

帝国議会始・・・1890＝63歳：

なお「課業日乗」を書き続けていたが、

大本教・・・1892＝65歳：前後不覚で眠ってしまった際、失火で焼死した。

没後20年になって、ようやく「漂荒紀事」の著者であることが確定される。